

女子大学生の自称詞使用の変化

——2001年と2011年の調査結果を比較して——

小 嶋 玲 子

How do Women's University Students Use Self-Reference Terms?

—Analysis of Differences in Use between 2001 and 2011—

Reiko OJIMA

はじめに

筆者が自称詞に興味をもったのは、2001年当時に、複数の女子大学生が教員である筆者に対して自称詞として名前・愛称を使用することに違和感をもったことに端を発する。そして実際どのような自称詞の使われ方をしているかについて当時の勤務校の女子短大で調査を行った。加えて、幼児・小学生・中学生の自称詞使用の実態調査も行った。その調査結果を2003年から2007年にかけて毎年教育心理学会でポスターとして発表してきた^{[1]~[5]}。10年が経過した2011年に改めて現勤務校の女子大学生の自称詞使用を調査し、さらに2013年に幼児期の自称詞使用についても再調査を行い、2012年~2015年に教育心理学会でポスター発表を行った^{[6]~[9]}。これらのポスター発表の中で幼児期の自称詞使用の発達的变化と年代別変化については、小嶋 (2016)^[10] でまとめ論じた。本論では、2001年と2011年の女子大学生の自称詞使用のデータを比較し、10年間での変化について論じる⁽¹⁾。

自称詞研究の流れ

本論に入る前に、自称詞研究の流れを概観する。鈴木 (1973)^[11] は、その著「ことばと文化」の中で日本語の人称代名詞と西欧の人称代名詞は一見同じように見えて、本質的に異なる概念の言葉であることを示し、日本語における自分を指す言葉を自称詞、相手を指す言葉を対称詞と総称した。日本語の自称詞、対称詞は対話における話し手と相手の具体的な役割を明示し確認するという機能を持つ。相手に対して話し手がどの地位にいるかを常に確認する言語なのである。さらに相手の役割を確認した上で自分の役割を規定する。つまり自称詞や対称詞は、話し手が自分自身の位置を明らかにする行為であり、特定の相手との権力関係、親疎の度合いなど自己を言語的に規定する行為であることを述べている。鈴木 (1973) の論考から発展して、日本語特有の自称詞の研究 (大西1992^[12]、緒方2015^[13]) がなされ、その流れの中で、外国人

への日本語教育の観点からの研究（大浜ら2001^[14]、高橋2002^[15]、伊藤ら2009^[16]）、男性（王2010^[17]）、女性（有松・皆川2011^[18]、西川2011a^[19]、2011b^[20]）、それぞれの自称詞使用の研究や男女の相違（松村2001^[21]、高橋2009^[22]）などの研究が存在する。また、特定の自称詞を取り挙げ、その使用方法についての研究は、「ひと」（鈴木1976^[23]）、「あたし」（山西・山田2008^[24]）、「自分」（汪2009^[25]、金2013^[26]）、「わし」（黒崎2011^[27]）などがある。さらに、日本の自称詞は「相手に対して相手がどの地位にいるかを常に確認する言語」（鈴木1973^[28]）のため、「敬語の使用」の文脈の中で調査が行われている（望月・島村1982^[29]、尾崎1995^[30]、三輪2000^[31]、国立国語研究所編2002^[32]、Slyusareva 2004^[33]）。また、自称詞の使い分けに焦点を当てた研究では、ある人が自称詞をどう使い分けするかを、小森（2008）^[34]は親族間で、佐藤（2008）^[35]は父子・母子間で、佐藤（2011）^[36]は父子間で調査している。

本論で述べる成人女性の自称詞研究においては、2000年の初めまでの論文では、女性の自称詞は「わたし」が一般的であること（松村2001）^[37]、名前の使用は親しい相手との会話のみで使われる傾向（Slyusareva 2004）^[38]が指摘されている。2010年代を過ぎると、有松・皆川（2011）^[39]や白石（2012）^[40]のデータからは、幼児期を過ぎても長期にわたり「名前」や「愛称」を自称詞として使用していることが示されるようになっていく。また、有松・皆川（2011）^[41]や西川（2011a^[42]、2011b^[43]）、宮沢（2015）^[44]では、女子学生が、複数の自称詞を相手や場面において使い分けしていることを指摘している。

心理学の分野では、子どもが一人称代名詞を使用するようになることは自己意識が明確になる時期として捉えられている（Wallon 1956/1983）^[45]。齋藤（1987）^[46]、岩田（1998）^[47]、白石（2011）^[48]は、子どもの言葉の発達という側面とそれに伴う自己の発達や対人関係の在り様と関係付けた研究を行っている。日本語の自称詞使用は、使用する人間の対人関係を示す指標となる得る可能性があるために、自己の発達や対人関係の文脈で研究がなされている。筆者の一連の研究も心理学的関心から行っており、小嶋（2016）^[49]でも、幼児の自称詞使用の発達的变化と時代的变化が自己意識の変化や人間関係を示す指標の一つとなりえるのではないかとこの立場を取っている。子どもの自称詞の発達的变化や特徴については西川^{[50]～[54]}が参考になる。

以上、自称詞研究の流れを概観してきたが、鈴木（1973）^[55]が人称研究に自称詞という概念を導入してすでに40年以上の時間が経つ。言葉は時代と共にその使用方法が変化するものであり、現在は、彼が提示した「日本語ではすべての自称詞、対称詞が人間関係の上下の分極に基づいた具体的な役割の確認とつながっている（p. 187）」という論点に対して、自称詞使用の時代的变化とそれに伴う役割意識の変化（それは自己意識の変化にもつながる）についての指摘がなされている。本論においても、女子大学生の自称詞の使用を10年前のデータと比較することで、女子学生の対人関係のとり方や自己意識について考える指標としたい。

目 的

女子大学生の自称詞の使用について、2001年調査と2011年調査の結果を比較し、10年間の

相違を明らかにする。

方 法

調査対象：2001年は、愛知県内女子短大保育科2年生252名。

2011年は、4年制女子大学保育学部2年生172名。

ただし両大学は同一敷地内にある。

調査年：2001年と2011年（共に後期授業後）

調査項目：日本語の自称詞は相手との関係によって異なるため、質問2では、場面を設定した質問を質問紙調査で実施した。

質問1：あなたは自分のことを他の人に話すとき、いつもどのようなことばを使っていますか。複数の回答は可能ですが、使う頻度の高い順に記入してください。自分の名前や愛称を使う人はその具体的なことばも書いてください。

質問2：あなたを含めて複数の人のいる部屋で、（先生、親、友人、きょうだい）が「誰か隣の部屋からはさみを持ってきてくれない？」と頼みました。自分が取ってきてあげようと言うことを伝えたいとき、（ ）の中にどんなことばを使いますか。記入例のまねをせず、状況を想像して自分の使うことばを書いてください。

	記入例1	記入例2
先生から頼まれた。	（わたし）が取ってきます。	（あたし）が取ってきます。
友人から頼まれた。	（わたし）が取ってくる。	（あたい）が取ってくる。
親から頼まれた。	（わたし）が取ってくる。	（自分の名前[例：美香]）が取ってくる。
きょうだいから頼まれた。	（わたし）が取ってくる。	（おねえちゃん）が取ってくる。

質問3：自称詞使用について思うところを述べる自由記述（2011年度のみ）

倫理的配慮：調査にあたっては、無記名調査であり、結果は、統計的に処理され、個人が特定されることがないことを説明し、公表の了解を得た。

結 果

1. 質問1の結果

(1) 使用する自称詞の数

問1に対する有効回答数（有効回答率）は2001年が252人（100%）、2011年が168人（97.7%）であった。書かれた自称詞の総数は2001年が502/252人、2011年が394/168人で、一人あたりの平均回答数は、2001年が1.99、2011年が2.35であった（表1）。

表1 2001年と2011年の自称詞調査の概要

	2001年	2011年
調査対象者	252	172
有効回答数	252	168
有効回答率	100%	97.7%
書かれた総自称詞数	502	394
1人当たりの平均使用自称詞数	1.99	2.35

表2 女子学生1人が使用する自称詞の数

自称詞 の数	2001年		2011年	
	人数	%	人数	%
1種類	96	38.1	33	19.7
2種類	73	28.9	64	38.1
3種類	72	28.6	54	32.1
4種類	10	4.0	14	8.3
5種類	1	0.4	3	1.8
人数	252		168	

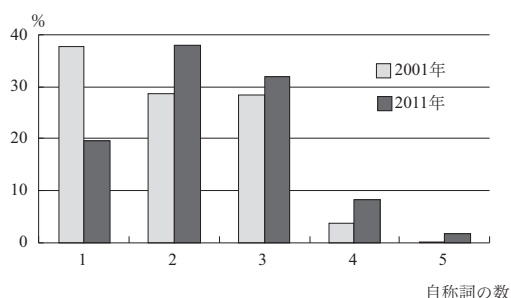


図1 女子学生1人が使用する自称詞の数

表3 自称詞の数（残差分析結果）

(上段調整された残差 下段検定結果)

1種類	2種類	3種類	4種類	5種類
4.016	-1.955	-0.782	-1.888	-1.436
**	+	ns	+	ns
-4.016	1.955	0.782	1.888	1.436
**	+	ns	+	ns
+p<.10 *p<.05 **p<.01				

ている。そして、2011年は、複数の自称詞を使用する学生が増加している。2001年と2011年の自称詞の使用数の分布に差があるかどうか χ^2 二乗検定を行った結果、1%水準で有意差が認められた($\chi^2_{(4)}=19.580, p<.01$)。残差分析の結果(表3)、2011年は1%の有意差をもって1種類の使用が減少していると言える。2、4種類の使用の増加については有意傾向であったが、1種類が複数使用かという分類では、複数使用の学生が増加していると言える。

(2) 個人内で使用頻度の高い自称詞

質問1では、「使う頻度の高い順に記入」することを求めたので、最初にかかれた自称詞(各学生が主に使用する自称詞)の割合を表4、図2に示す。なお、本論で「名前」という場合は、姓(Last Name)でなく下の名前(First Name)を示す。

使用頻度の高い自称詞の内、一人称(わたし・あたし・うちの合計)の割合は2001年(87.7%)

表4 個人内で使用頻度の高い自称詞

自称詞 の種類	2001年		2011年	
	人数	%	人数	%
わたし	151	59.9	46	27.4
あたし	60	23.8	47	28.0
うち	10	4.0	54	32.1
名前	24	9.5	19	11.3
愛称	5	2.0	1	0.6
自分	2	0.8	1	0.6
人数計	252		168	

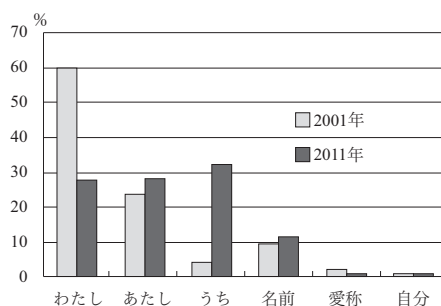


図2 個人内で使用頻度の高い自称詞

と2011年(87.5%)で変わらないが、「うち」を最初に書いた割合は2001年の4.0%から2011年は32.1%と8倍にもなっている。「わたし」を最初に書いた割合は2001年が59.9%で、2011年は27.4%と半減している。「あたし」を最初に書いた割合は2001年が23.8%、2011年が28.0%とほぼ変わらない。使用頻度の高い自称詞として名前・愛称を記入する女子学生は2001年が11.5%で2011年は11.9%とそれぞれ11%程度である(表4)。

個人内で使用頻度の高い自称詞の種類により2001年と2011年で使用人数に差があるかどうかを χ^2 二乗検定で検討した結果1%の有意差が認められた($\chi^2_{(5)}=77.683$, $p<.01$)。残差分析の結果(表5)、「わたし」の使用の減少、「うち」の使用の増加が統計的有意差をもって認められた。

(3) 使用される自称詞総数の中での各自称詞の割合

使用される自称詞の総合計の中で各自称詞の使用の割合を表6と図3に示した。表6からは、「わたし」の使用が2001年の38.8%から2011年の27.1%に減少しており、反対に「うち」の使

表6 使用される各自称詞の割合

自称詞の種類	(複数回答)			
	2001年		2011年	
	人数	%	人数	%
わたし	195	38.8	107	27.1
あたし	98	19.5	81	20.6
うち	27	5.4	94	23.8
名前	78	15.5	54	13.7
愛称	34	6.8	16	4.1
自分	32	6.4	31	7.9
姉	22	4.4	4	1.0
他	16	3.2	7	1.8
自称詞総数	502		394	
回答者数	252		168	

表5 優先使用の自称詞(残差分析結果)

(上段調整された残差 下段検定結果)					
わたし	あたし	うち	名前	愛称	自分
6.546	-0.96	-7.871	-0.591	1.175	0.237
**	ns	**	ns	ns	ns
-6.546	0.96	7.871	0.591	-1.175	-0.237
**	ns	**	ns	ns	ns
+p<.10 *p<.05 **p<.01					

用が2001年の5.4%から2011年の23.8%へと増加している。使われる自称詞総数中で、自称詞の種類により、使用頻度に差があるかどうかを χ^2 二乗検定で検定した結果、1%の有意差が認められた($\chi^2_{(7)}=79.334$, $p<.01$)。残

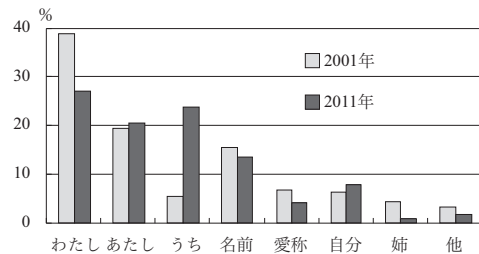


図3 使用される各自称詞の割合(複数回答)

表7 使用される各自称詞の割合(複数回答) 残差分析結果

(上段調整された残差 下段検定結果)							
わたし	あたし	うち	名前	愛称	自分	姉	他
3.673	-0.385	-8.033	0.768	1.755	-0.868	2.98	1.325
**	ns	**	ns	+	ns	**	ns
-3.673	0.385	8.033	-0.768	-1.755	0.868	-2.98	-1.325
**	ns	**	ns	+	ns	**	ns
+p<.10 *p<.05 **p<.01							

差分析の結果（表7）、使用頻度多い自称詞と同様、「わたし」使用の減少、「うち」の使用の増加が統計的に有意差をもって認められた。さらに「姉（お姉ちゃん）」の使用の減少が認められた。なお、その他に分類された自称詞は、ぼく、おいら、わし、あーしなどである。

2. 質問2の結果

問2に対する有効回答数（有効回答率）は、2001年が247名（98.0%）、2011年が169名（98.3%）であった。2001年と2011年の詳細結果を表8に示す。分かり易いように、わたし、あたし、うち、名前+愛称の%の値のみ表9に再掲する。また、相手別自称詞の割合の2001年と2011年の結果を図4、図5に示す。

4場面ですべて同じ一つの自称詞を使用する学生は、2001年では「わたし」のみ使用が88/247人（35.6%）、「あたし」のみ使用が8/247人（3.2%）で計96/247人（38.8%）と1/3強存在しているが、2011年は「あたし」のみ使用の8人と「うち」のみ使用の1人の計9/169人（5.3%）であり、「わたし」を4場面とも使用している学生はいなかった。このことは、2011年の女子学生の94.7%が場面によって自称詞を使い分けていることを意味している。

先生に対しては、2001年と2011年の変化は少ないが、「わたし」の使用が減少し（2001年92.3%→2011年84.0% [-8.3]）（以下「→」印は2001年から2011年の変化を示す）、「あたし」の使用が増加（6.9%→13.6% [+6.7]）している。しかし、 χ^2 二乗検定では有意差は認められなかった。検定は、「わたし」「あたし」「うち」と「他はすべてその他」にまとめて実施した。

友人に対しての2001年と2011年の自称詞の使用について、 χ^2 二乗検定の結果、有意な差が、1%の有意水準で認められた（ $\chi^2_{(5)}=86.669$, $p<.01$ ）。検定は、「お姉ちゃん」と「無回答」が0であったので、「わたし」「あたし」「うち」「名前」「愛称」、「他はすべてその他にまとめ」て実施した。残差分析の結果、「わたし」の使用が減少し（54.3%→18.9% [-35.4]）、「うち」の使用が増加（6.1%→37.9% [+31.8]）していることが1%の有意水準で認められた。

親に対しての2001年と2011年の自称詞の使用について、 χ^2 二乗検定の結果、有意な差が、1%の有意水準で認められた（ $\chi^2_{(8)}=70.241$, $p<.01$ ）。残差分析の結果、「わたし」の使用が減少し

表8 相手別自称詞の割合（2001年と2011年の結果）

2001年	先生 人数 %	友人 人数 %	親 人数 %	きょうだい 数 %	2011年	先生 人数 %	友人 人数 %	親 人数 %	きょうだい 数 %
わたし	228 (92.3)	134 (54.3)	99 (40.1)	95 (38.5)	わたし	142 (84.0)	32 (18.9)	29 (17.1)	21 (12.4)
あたし	17 (6.9)	62 (25.1)	51 (20.6)	43 (17.4)	あたし	23 (13.6)	46 (27.2)	37 (21.9)	30 (17.8)
うち	0 (0)	15 (6.1)	3 (1.2)	2 (0.8)	うち	1 (0.6)	64 (37.9)	36 (21.3)	34 (20.1)
名前	0 (0)	30 (12.1)	57 (23.1)	44 (17.8)	名前	0 (0)	20 (11.8)	52 (30.8)	42 (24.8)
愛称	0 (0)	4 (1.6)	20 (8.1)	19 (7.7)	愛称	0 (0)	3 (1.8)	7 (4.1)	6 (3.6)
自分	2 (0.8)	1 (0.4)	1 (0.4)	0 (0)	自分	3 (1.8)	3 (1.8)	2 (1.2)	21 (12.4)
その他	0 (0)	1 (0.4)	2 (0.8)	2 (0.8)	その他	0 (0)	1 (0.6)	2 (1.2)	1 (0.6)
お姉ちゃん	0 (0)	(0) (0)	12 (4.9)	40 (16.2)	お姉ちゃん	0 (0)	(0) (0)	2 (1.2)	1 (0.6)
無回答	0 (0)	(0) (0)	2 (0.8)	2 (0.8)	無回答	0 (0)	(0) (0)	2 (1.2)	13 (7.7)
計	247 100	247 100	247 100	247 100	計	169 100	169 100	169 100	169 100

(40.1%→17.1% [-23.0])、「うち」の使用が増加 (1.2%→21.3% [+20.1]) していることが 1 % の有意水準で認められ、「名前」の使用の増加 (23.1%→30.8% [+7.7]) が有意傾向で認められた。また、「お姉ちゃん」の使用の減少 (4.9%→1.2% [-3.7]) が 5 % の有意水準で認められた。

きょうだいに対しての 2001 年と 2011 年の自称詞の使用について、 χ^2 二乗検定の結果、有意な差が、1 % の有意水準で認められた ($\chi^2_{(7)}=136.788, p<.01$)。検定は、2001 年の「自分」使用が 0 だったので「その他」と合わせて行った。残差分析の結果、「わたし」の使用 (38.5%→12.4% [-26.1]) と「お姉ちゃん」の使用 (16.2%→0.6% [-15.6]) が減少していること、反対に「うち」の使用 (0.8%→20.1% [+19.3]) と「自分とその他」の使用 (0.8%→13.0% [+12.2]) が増加しており、特に、「自分」の使用は 0 % から 12.4% と増加していることが認められた (共に 1 % 水準での有意差である)。また、「名前」の使用の増加 (17.8%→24.8% [+7.0]) と「愛称」(7.7%→3.6% [-4.1]) の使用の減少が有意傾向で認められた。さらに、無回答が (0.8%→7.7% [-6.9]) 増加している。きょうだいに対する項目のみ、きょうだいがいない人は回答をしなくても良いと記載した結果であり、一人っ子が増加していることが 1 % 水準で認められた。

3. 質問 3 の結果 (2011 年調査のみ)

質問 3 として自称詞使用について思うところを述べる自由記述には 169 人中 87

表 9 2001 年と 2011 年の比較

先生に	わたし	あたし	うち	名前・愛称
2001 年	92.3%	6.9%	0.0%	0.0%
2011 年	84.3%	13.6%	0.6%	0.0%
差	-8.3%	+6.7%	0.6%	0.0%

友人に	わたし	あたし	うち	名前・愛称
2001 年	54.3%	25.1%	6.1%	13.7%
2011 年	18.9%	27.2%	37.9%	13.6%
差	-35.4%	+2.1%	+31.8%	-0.1%

親に	わたし	あたし	うち	名前・愛称
2001 年	40.1%	20.6%	1.2%	29.2%
2011 年	17.1%	21.9%	21.3%	34.9%
差	-23.0%	+1.3%	+20.1%	+5.7%

きょうだいに	わたし	あたし	うち	名前・愛称
2001 年	38.5%	17.4%	0.8%	25.5%
2011 年	12.4%	17.8%	20.1%	28.4%
差	-26.1%	+0.4%	+19.3%	+2.9%

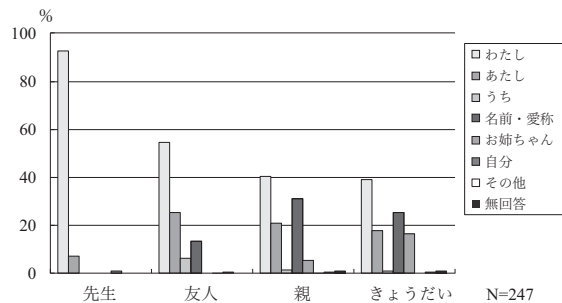


図 4 2001 年

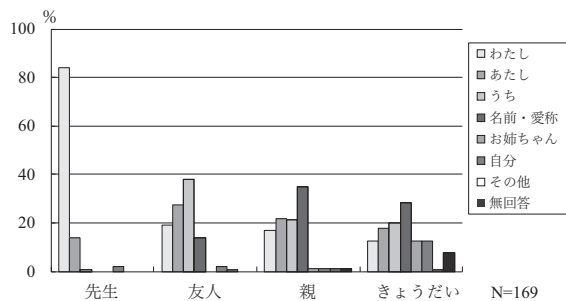


図 5 2011 年

人（51.5％）の回答があった。自分の自称詞使用について書かれているものを KJ 法で分けると大きく以下の 3 タイプとその他の 4 分類に分けることができた。その他に分類したものは 11 人分である。

第 1：「わたし」を主として使用しているタイプ（29人）。
第 2：相手や場面によって使い分けているタイプ（28人）。
第 3：そろそろ変えたいという意識のあるタイプ（19人）。

第 1 のタイプでは、成人女子としては社会的には「わたし」を使用することが望ましいと考えられるので、ある時期（中学～大学と幅は広い）に自ら直した、あるいは親や教師から指摘されて直したとの記述が見られた。自称詞として名前・愛称を使用している学生に対して大人としての自覚が足りないとの印象を持っている学生も存在した。第 2 のタイプでは、場面や相手による自称詞の使い分けをしているとの記述が見られた。ただし、その使い分けについては意識的である学生と無意識的である学生の二通りが存在した。第 3 のタイプは、年齢的に「わたし」に変えたいと思っているが変えられないという悩みが述べられていた。その他には女性が「男性自称詞」を使うことへの意見や自称詞使用について全く意識していないという意見、自分が使用している自称詞の由来などが書かれていた。

考 察

筆者にとって、自分を示す自称詞は「わたし」であり、どの場面においても「わたし」を使用してきた。改まった場面で「わたくし」を使用したり、第三者的に話をしたい時に限り、自分の姓を名乗って述べたりすることはあるが、ほとんど場合「わたし」を使用している。たぶん鈴木（1973）^[56] の論考以前に生まれた女性にとっては「わたし」が一般的な一人称としての認識があるのではないかと思う。しかし、本調査の質問 1 の結果から一種類の自称詞しか使わない女子学生の割合は 2001 年（短大 2 年生）で 38.1％であり、2011 年（四年制大学 2 年生）では 19.7％であり、一人あたりの平均使用自称詞数は、2001 年（短大 2 年生）が 1.99、2011 年（四年制大学 2 年生）が 2.35 であった。社会人生活を数ヵ月後に控えた短大生と 2 年以上先という四大生のデータの相違の可能性もあるが、最近の短大生の調査（西川 2011b）^[57] では、一人あたりの自称詞の平均使用個数が 2.8、一種類のみ使用の割合が 6％であり、この 10 年間で複数の自称詞を使用する女子学生の割合が増加していると考えられる⁽²⁾。

質問 2 では、4 場面同一の自称詞使用の割合は、2001 年が 38.8％、2011 年が 5.3％であった。本来ならば、質問 1 で一種類の自称詞しか記入しない割合と同じ（2001 年 38.1％、2011 年 19.7％）になるはずである。2001 年はほぼ同じ割合であるが、2011 年の結果の差は大きい。質問 1 は、「あなたは自分のことを他の人には話すとき、いつもどのようなことばを使っていますか。複数の回答は可能ですが、使う頻度の高い順に記入してください。」という問いであった。2001 年では、その「いつも」は質問 2 の「4 場面すべて」の「いつも」であるが、2011 年で

はそうではなく、「いつも」は使用頻度が高いだけであって、たとえ本人自身が「いつも」1種類の自称詞しか使わないと思っていても、場面ごとで使用する自称詞の種類を変えているということである。西川 (2011b)^[58]の結果(6%)から考えて、問2での5.3%が実質一種類の自称詞しか使用しない割合と考えた方がよいのかもしれない。とすると、一人あたりの使用自称詞数も2011年は2.35より大きい可能性もある。2011年の結果において、質問2で4場面すべてに「わたし」を使用する学生が0であったことは、筆者にとっては驚きであった。

個人内で使用頻度の高い自称詞、及び使用される総自称詞数の中での各自称詞の割合のどちらにおいても2001年に比べて、2011年は「わたし」の使用の減少と「うち」の使用の増加が認められた。関西圏で使用が多いとされる「うち」の使用が、東海圏の大学の学生においても増加している点については、マスメディアの影響も考えられるが、自分の属する集団等へ仲間意識の強さの表われの表現とも考えられる。中村 (2004)^[59]は、「ウチら」と「オソロ」という言葉で女子高校生の仲間意識を表している。西川 (2002)^[60]は、5歳児クラス女兒の「うち」使用について一つの「ブーム」として論述しているが、西川 (2011b)^[61]では、女子短大2年生の55.3%が「うち」を使用している実態を報告し、「若い女性たちが、フォーマリティが低く、比較的使用しやすい『うち』を使うことによって、自分のアイデンティティを示していることは、『わたし』とも『名前』や『愛称』を使うこととも異なる世界を構築していることを示すものである。」(p. 97)と述べている。村中 (2015)^[62]は、「ウチは、同じく私的場面でよく使われるアタシと比べても、私的ニュアンスがより強いように思われる。また、これは仮説にとどまるが、ウチはアタシに比べてより強く、女性性を表すのではないか。」(p. 74)と述べている。同じ一人称である「あたし」については、山西・山田 (2008)^[63]では、「『あたし』が女性たちの『素直な自分』を伝える手段」(p. 199)として記述されている⁽³⁾。

質問2での話し相手が異なる場合、先生に対しては「わたし」の使用率が高い。友人・親・きょうだいに対する自称詞使用は10年間で変化し、「わたし」使用に限定されなくなっていることが分かる。友人・親・きょうだいに対しては、質問1での結果と同様、自称詞使用の全体的な傾向である「わたし」の使用の減少、「うち」の使用の増加が見られた。「うち」という仲間意識のためか、特に友人に対して「うち」使用の増加傾向が見られた。親・きょうだいには友人に比較してより多くの種類の自称詞が使われている。2001年に比べて2011年は、親・きょうだいという親族間で「お姉ちゃん」という呼称の減少が認められた。この要因として結果からは、一人っ子の増加が考えられる。加えて、親・きょうだいに対して、上下関係を表す呼称の敬遠も一要因として考えられる。なぜなら、「自分」「名前」は、2001年、2011年ともに先生・友人に対してと比べて、親・きょうだいに対して多く使用される傾向にあり、2011年はさらにその傾向が強まっているからである(表8)。親やきょうだいには、「名前・愛称」が使われやすいことに関して、西川 (2011)^[64]は、「親に呼ばれるままに、自分を名乗ることは、その生活史の延長上で生きることを示し、(中略)多くの家庭で、娘が『名前』や『愛称』で名乗ることをとがめることなく受け止めている理由もみえてくる。」(p. 98)と述べている。

表9では、「先生」に対して、「一人称」ではなく「名前・愛称」を使用する学生は0である

が、実際問題として「先生」である筆者と話す時にも「名前・愛称」で自分のことを示す学生は存在する。質問3の結果が示すように、学生たちは、改まった場面や大人としては「わたし」の使用が適切であると感じており、意識の上では「先生」に対して「名前・愛称」は使用しないと思っていて、それが質問紙の回答に表れていると理解する。つまり、今回の結果は質問紙調査であるので、学生たちの望ましい方に回答するバイアスが働いている可能性は否めない。

筆者は、個人的感触として2011年の方がより、学生の「名前・愛称」の使用の増加を感じているが、個人内で使用頻度の高い自称詞としてはこの10年間の割合はほぼ同程度であり（表4、〔名前+愛称〕2001年11.5%、2011年11.9%）、使用される総自称詞の中での「名前・愛称」の使用割合においては、2011年の方が減少している（表6〔名前+愛称〕2001年22.3%、2011年17.8%）。これは表中に示される%が使用総数の中での割合を算出しているため、2011年では「うち」の使用の割合が著しいため、相対的に「名前・愛称」の割合が少なく見積もられたと考えられる。村中（2015）^[65]は、自称詞としての「下の名前」使用について全国的に増加していることを指摘した上で、その位置づけにおいて「絶対的な個」の重視とその表現である可能性を指摘している。筆者にとって学生が自称詞に「名前」を使用するときは、対話者である「わたし・あなた」関係が切り離され、第三者の話として受け取れ、学生との距離が遠のくのであるが、学生の方は、教員との関係が親しいほど一人称ではなく「名前」を使うようである。つまり、教員と学生という上下関係ではなく、その教員とどれだけ親しいかどうかで、一人称が使われるか「名前」が使われるかが決まっているようにも感じている。質問3の結果から、女子大学生の自称詞使用の3パターンが推測できるが、今回の調査では自称詞の使い分けの基準や理由については明らかでないので、それらを明らかにしていくことが今後の課題である。

中学生の自称詞の結果（小嶋2006^[66]、2007^[67]）から、使用される自称詞には性差や学年に伴う年齢的变化に加え、所属集団独自の使用形態が存在することが示された。自称詞が、自分の立ち位置やアイデンティティを表す一つの表現手段とするならば、周りの使用する自称詞を選択したり、敢えて異なる自称詞を使用したりすることで、集団内での個人の立場を表しているとも考えられる。長田（2010）^[68]は、相手が使用する自称詞によって、その人の印象形成が異なることを示しているが、自称詞選択の要因には他者からの印象形成という要因も見逃すことができない。SNS上のハンドルネームも自称詞の一種とするならば、そこに自己の存在感を含めた自己アピールの意図があると考えられる。

佐藤（2011）^[69]は、父親が子どもに対して、親族名称で自称する場合と人称名詞で自称する場合の相違を検討している。また、小森（2008）^[70]は、親族間での自称詞の使用について分析し、「一人の話者が同じ聞き手に対していくつかの自称詞を使い分けたり、自称詞にゆれが生じる実態」（p. 17）を捉えている。本論の質問2では、その場面での代表的な回答しか得ていないが、同じ相手に対しても、女子大学生たちは、いくつも自称詞を使い分けていたり、時によりゆれが生じたりすることもあるだろう。筆者のように「わたし」という自称詞しか使用してこなかった世代の女性ではなく、さまざまな自称詞を場面や人によって使い分ける現代の女子大学生が、その自称詞によって自分と相手の関係をどのように位置づけているのかを知るこ

とも今後の課題としたい。

注

- (1) 本論文は、日本教育心理学会（小嶋2012, 2013）で発表した内容に、未発表データを加えて再分析し、一つにまとめて書き直したものである。
- (2) 西川（2011a）では、2009年と2010年度調査の学生が使用している自称詞の数は2.7、一種類しか使用していない学生は7%である。西川（2011b）では、2011年度調査を加え、自称詞の数は2.8、一種類の使用が6%と述べられている。
- (3) 本学教員の嶋守さやか氏の著作『孤独死の看取り』（新評論、2015年）においても「わたし」と「あたし」が使い分けられており、その理由を尋ねると、著者は「公的記述には『わたし』を、私的記述には『あたし』を使用したと述べられた。

引用文献

- [1] 小嶋玲子 2003 自分を示す人称代名詞（自称詞）の発達的变化 日本教育心理学会第45回総会発表論文集 p. 561
- [2] 小嶋玲子 2004 自分を示す人称代名詞（自称詞）の発達的变化(2)—男女差に焦点をあてて— 日本教育心理学会第46回総会発表論文集 p. 119
- [3] 小嶋玲子 2005 自分を示す人称代名詞（自称詞）の発達的变化(3)—「おれ」「うち」の使用に焦点をあてて— 日本教育心理学会第47回総会発表論文集 p. 52
- [4] 小嶋玲子 2006 中学生における自称詞（自分を示す人称代名詞）の使用 日本教育心理学会第48回総会発表論文集 p. 207
- [5] 小嶋玲子 2007 中学生における自称詞（自分を示す人称代名詞）の使用(2)—話し相手による自称詞使用の相違— 日本教育心理学会第49回総会発表論文集 p. 434
- [6] 小嶋玲子 2012 女子学生における自称詞の使用(1)—2001年と2011年の調査結果を比較して— 日本教育心理学会第54回総会発表論文集 p. 277
- [7] 小嶋玲子 2013 女子学生における自称詞の使用(2)—2001年と2011年の話し相手別自称詞の使用— 日本教育心理学会第55回総会発表論文集 p. 169
- [8] 小嶋玲子 2014 幼児の自称詞の使用(1)—2001年と2013年の調査結果を比較して— 日本教育心理学会第56回総会発表論文集 p. 906
- [9] 小嶋玲子 2015 幼児の自称詞の使用(2)—使用される自称詞の種類に着目した2001年と2013年の比較— 日本教育心理学会第57回総会発表論文集 p. 175
- [10] 小嶋玲子 2016 幼児の自称詞使用—2001年と2013年の結果を比較して— 桜花学園大学保育学部研究紀要 第14号 pp. 63-74
- [11] 鈴木孝夫 1973 ことばと文化 岩波書店 pp. 129-206
- [12] 大西智之 1992 日本語の自称詞と人称代名詞—鈴木説再考— 帝塚山大学教養学部紀要 30 pp. 26-46
- [13] 緒方隆文 2015 呼称のカテゴリー分析—自称詞・対称詞・他称詞— 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要 10 pp. 1-13
- [14] 大浜るい子・荒牧ちさ子・曾儀婷 2001 日本語教科書に見られる自称詞・対称詞の使用について 中国四国教育学会 教育学研究紀要 第47巻 第2部 pp. 342-352
- [15] 高橋美奈子 2002 日本語学習者による人称表現の使い分け—日本語母語話者との手紙交換活

- 動の分析より— ことば (23) pp. 25-39
- [16] 伊藤由希子・李綿淑・佐藤万里子・尹惠靖・李楠・大沢裕子・山本実佳 2009 男性自称詞に関する考察—日本語学習者の学びと関わり— 待遇コミュニケーション研究 (6) pp. 1-16
- [17] 王龍 2010 日本の男性の話し方の特徴—年代の異なる男性の自称詞使用— 比較社会文化研究 第29号 pp. 23-30
- [18] 有松しづよ・皆川晶 2011 キャンパス内における女子大学生の使用自称詞とその選択基準—日本語教育における自称詞の提示に係る基盤研究として— かやのもり：近畿大学産業理工学部研究報告 (15) pp. 37-41
- [19] 西川由紀子 2011a 女子学生の自称詞の使い分け—私・うち・名前— 日本発達心理学会第22回大会発表論文集 p. 580
- [20] 西川由紀子 2011b 女子学生の自称詞の使い分け：わたし・うち・名前 研究紀要（華頂大学）(56) pp. 91-99
- [21] 松村瑞子 2001 日本語の会話に見られる男女差 比較社会文化 第7巻 pp. 69-75
- [22] 高橋美奈子 2009 地域語からみた自称詞における性差再考 ことば (30) pp. 82-95
- [23] 鈴木孝夫 1976 自称詞としての「ひと」 慶応義塾大学言語文化研究所紀要 慶応義塾言語文化研究所 No. 8 pp. 43-58
- [24] 山西正子・山田繭子 2008 「あたし」考 目白大学 人文学研究 第4号 pp. 183-200
- [25] 汪宇 2009 広告に使用される「自分」—人称詞との比較を中心に— ことば (30) pp. 96-105
- [26] 金雪花 2013 自称詞用法の「自分」の許容度を上げる要因：「主語・主題」に位置する「自分」について 一橋大学国際教育センター紀要 (4) pp. 75-86
- [27] 黒崎佐仁子 2011 役割語から考える自称詞「わし」の方言性と出現時期 聖学院大学論叢 23(2) pp. 1-14
- [28] 前掲 [11] p. 180
- [29] 望月重信・島村直己 1982 子どものことばづかい—自称詞の使用と使用意識を中心に— 明治学院論叢 327 pp. 77-93
- [30] 尾崎喜光 1995 若者の敬語—学校生活における自称詞・対称詞の使用状況— 青少年問題 42(11) pp. 11-16
- [31] 三輪正 2000 人称詞と敬語—言語倫理的考察— 人文書院
- [32] 国立国語研究所編 2002 5 敬語の使用 5-1 自称詞 「学校の中の敬語 1—アンケート調査編—」 pp. 30-53 三省堂
- [33] Slyusareva Elena 2004 生徒・学生の敬語に関する知識および意識に関するアンケート調査の結果—新潟市とその周辺にある小学校・中学校・高等学校の調査結果から— 現代社会文化研究 No. 31 pp. 245-260
- [34] 小森由里 2008 自称詞にみられるスタイル変異—親族の事例より— 日本女子大学英米文学研究 43 pp. 1-20
- [35] 佐藤響子 2008 親から子への自称詞使用実態とアイデンティティ構築 横浜市立大学論叢人文科学系列 Vol. 59 No. 1.2 合併号 pp. 279-300
- [36] 佐藤響子 2011 父親が使う自称詞：なぜそこでそれが選択されるのか 横浜市立大学論叢人文科学系列 Vol. 62 No. 2 pp. 1-23
- [37] 前掲 [21]
- [38] 前掲 [33]
- [39] 前掲 [18]
- [40] 白石優子 2012 幼児期と青年期における自称詞使用の様相と自己の意識（修士論文要旨）

- 人間科学研究 Vol. 25 Supplement p. 125 早稲田大学人間科学学術院
- [41] 前掲 [18]
- [42] 前掲 [19]
- [43] 前掲 [20]
- [44] 宮沢秀次 2015 女子大学生の自己呼称に関する心理学的分析 人文科学論集 No. 94 45-55
(名古屋経済大学人文科学研究会)
- [45] Wallon, H. 1983 身体・自我・社会—子どものうけとる世界と子どもの働きかける世界—(浜田寿美男訳編) ミネルヴァ書房 (Wallon, H. (1956) *Niveaux de fluctuation du moi.*)
- [46] 齋藤こずゑ 1987 性役割認知の発達とコミュニケーション—ワタシはボク?— 国学院雑誌 88(11) pp. 28-43
- [47] 岩田純一 1998 〈わたし〉の世界の成り立ち 金子書房
- [48] 前掲 [40]
- [49] 前掲 [10]
- [50] 西川由紀子 1996 子どもの使用する一人称の変化 日本教育心理学会第38回総会発表論文集 p. 147
- [51] 西川由紀子 2002 5歳児女兒は自称詞をどのように使っているのか? 「うち」使用ブームに着目して 研究紀要(華頂短期大学) 47 pp. 88-101
- [52] 西川由紀子 2003 子どもの自称詞の使い分け「オレ」という自称詞に着目して 発達心理学研究 14(1) pp. 25-38
- [53] 西川由紀子 2003 クラス集団に規定された自称詞の使い分け—オレって言ったらヒゲがはえるんやで— 研究紀要(華頂短期大学) 48 pp. 155-167
- [54] 西川由紀子 2006 3歳児クラス児の自称詞使用状況: 9月と3月の縦断観察データに基づいて 日本教育心理学会第48回総会発表論文集 p. 381
- [55] 前掲 [11]
- [56] 同上
- [57] 前掲 [20]
- [58] 同上
- [59] 中村泰子 2004 「ウチら」と「オソロ」の世代—東京・女子高生の素顔と行動— 講談社文庫
- [60] 前掲 [51]
- [61] 前掲 [20]
- [62] 村中淑子 2015 関西方言の自称詞・対称詞に関する覚え書き 現象と秩序 第3号 pp. 69-80
- [63] 前掲 [24]
- [64] 前掲 [20]
- [65] 前掲 [62]
- [66] 前掲 [4]
- [67] 前掲 [5]
- [68] 長田瑞恵 2010 自称詞の違いと印象形成—発話者の性別・年齢との関連— 計量国語学 Vol. 27 No. 6 pp. 233-242
- [69] 前掲 [36]
- [70] 前掲 [34]

(受理日 2017年8月22日)